

2024年3月23日

お知らせ

東京大学東アジア藝文書院と立命館大学加藤周一現代思想研究センターは、下記の通り第2回共同公開研究会「雑種文化の可能性——加藤周一、芥川龍之介、アナトール・フランス」を共催いたします。公開研究会では、加藤周一の提唱した雑種文化論は何を契機にして生まれたのか、さらに雑種文化論の可能性について、加藤が愛読した芥川龍之介やアナトール・フランスを引照し、林達夫や柳田国男を参照しつつ検討を加えます。今回は、芥川研究、とりわけその切支丹物研究の泰斗であられる宮坂覺先生をお招きいたしました。公開研究会は対面とウェビナーとの併用で行います。多くの方の御参加をお待ちしています。

記

- 日時** 2024年5月31日（金）14:00～17:00
- 会場** 東京大学駒場キャンパス 101号館11号室（EAA セミナールーム）
- 基調講演** 宮坂覺（フェリス女学院大学名誉教授、元同大学学長）
「芥川の〈切支丹もの〉の世界——その多層的意味の一考察——」
- 報告1** 半田侑子（立命館大学加藤周一現代思想研究センター研究員）
「芥川文学と加藤周一の「雑種文化」論」
- 報告2** 伊達聖伸（東京大学教授）
「造り変える力の小さな希望——この国の霊と戦う相対主義」
- 司会** 鷲巣 力（立命館大学加藤周一現代思想研究センター顧問）
- 参加方法** 会場参加：事前申込・登録は不要
参加費無料、直接会場にお越しください
ウェビナー参加：要事前申込（5月30日まで）下記から登録してください。

<https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSeZveey9T4yNaan93VIE-ATGTm->

[LoxH-I54lwDrz0bOAqoqDg/viewform?usp=sf_link](https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSeZveey9T4yNaan93VIE-ATGTm-LoxH-I54lwDrz0bOAqoqDg/viewform?usp=sf_link)

講演要旨

宮坂覺「芥川の〈切支丹もの〉の世界—その多層的意味の一考察—」

芥川龍之介は、「素材や形式や人間の精神のはたらきかたや意識のさまざまな層を、モザイクのように多様に造形した」（中村真一郎）。彼の作品世界は、懐が深く、単に〈術学〉〈知的〉〈理知〉の視点だけでは、解き明かすことは出来ない。自身も、「芸術に於ける単純さと云ふものは、複雑さの極まつた単純さなのだ」（「芸術その他」）という。それを前提に、日本近代文学に特異な、芥川の〈切支丹もの〉の世界を考察してみたい。そこで、〈切支丹もの〉の出自、テーマ、展開にアプローチする。さらに、〈鎖国〉の持つ意味にも言及できればと考えている。

半田侑子「芥川文学と加藤周一の「雑種文化」論」

明治維新以後、西洋文明の衝撃を受けて進められた日本の近代文化を、加藤周一は「雑種文化」と定義した。それは種々の反響を呼び起こすことになった。加藤が「日本文化の雑種性」（1955）をはじめとする一連の「雑種文化」論を執筆した動機は、渡仏経験によるものと考えられてきた。しかし加藤は中学時代から、芥川龍之介に深く傾倒していた。芥川は西洋へ留学することなしに、アナトール・フランスなど西洋文学を理解した作家である。本報告は加藤が定義した「雑種文化」の原点は芥川文学にあったという視点から、芥川が加藤に与えた影響を考える。

伊達聖伸「造り変える力の小さな希望——この国の霊と戦う相対主義」

本発表は、芥川龍之介の〈切支丹もの〉のなかでも最重要と考えられる「神々の微笑」と加藤周一の問題作「雑種文化論」を、反自然主義的な批評の実践の観点から関連づけようとするものである。この企てにおいて見え隠れするのは、芥川が多大な影響を受け、また加藤のフランス文学との最初の出会いとなったアナトール・フランスである。芥川も加藤も、日本の思想的土壌に普遍的なものが根付きにくいことを強く意識していたと言える。本発表では、この問題に向き合ったアナトール・フランスの読者として、さらに林達夫と柳田國男を召喚し、〈国体〉に抵抗する〈個人〉やもうひとつの〈日本的なもの〉の在処を探る。

以上